

## おじいちゃんのおどん

富山県  
射水市立新湊小学校 四年

荒木 瑛雄

ぼくの家では、料理の得意なおじいちゃんが、ご飯の用意をしてくれる。何でも簡単に作ってしまうおじいちゃんのおどん料理は、「うどん」だ。にほしとこんぶを使った、おじいちゃんのひ伝のだしらしい。じいちゃんのおどんはおいしいけれど、ぼくは、うどんよりスパゲッティやラーメンの方が好きなので少ししかうどんを食べないことが多い。それに、じいちゃんに食べたいはよく、「早く食べんか」と、急がせてくるので、静かに食べたいはよく、「じいちゃんうるさいだまっ」として」と、強い言葉をじいちゃんに言つて、さつさと食べたいものを食べたなら、台所から部屋へ行つてしまふことが多い。

ある日、ぼくは朝から気分が悪いまま学校へ行き、午前の学習中に高熱が出て早退してしまつた。その時、家からじいちゃんが学校へむかえに来てくれた。そしてすぐに病院へ連れて行つてくれた。いつもならばよくがしつこいと思うくらい何でもしゃべつてくるじいちゃんが、車の中では何もぼくに話しかけず、だまつてぼくの面どうをみてくれた。

「じいちゃん、何でだまつんが。」

と、ぼくが心配になつて聞くと、

「だやいがやから、ちんとしとろ。」

と、一言だけそう言つて車の運転を続けた。

家に帰るとじいちゃんは、すぐに、ぼくの昼ご飯の用意をしてくれた。

「かぜひいたら、消化のいいもの食べてねるのが一番。」

と言つて、じいちゃんはおどんを作つてくれた。その時ぼくは、じいちゃんがどれだけぼくのことを気にかけているのかがよく分かつた。そういうえば、放課後、友達と遊べなかつた時じいちゃんによくぼくとサッカーをして遊んでくれたり、自転車練習につきあつてくれたりしている。買い物に行くこと、こっそりおかしを買つてくれたりもする。いつだつてぼくのことを思つてくれるのに、ぼくは、じいちゃんに冷たくしてばかりいる。それでもじいちゃんは、変わらずぼくのことを考えてくれている。ぼくは、じいちゃんに悪いことをしていたなあという気持ちでこみ上げ、涙が止まらなかつた。「かぜひいとるから、ちよとうす味にしたけど味うすいか。」と、じいちゃんはよくにたずねた。たしかに少しうす味だと思つたけど、ぼくの涙とだしがまぎつたうどんのしるは、ちよとよい味がした。

「じいちゃん、おかわりしていい。」

と、ぼくが聞くと、

「それだけ食よくあつたらすぐ治るちゃ。」

と、うれしそうに言つてくれた。

少し口うるさいじいちゃんだけど、これからは「ありがとう」の気持ちこめて、大好きなじいちゃんのおしやべりに、少しだけ付き合つてみようかなと思つた。